



NPO法人
ヒマラヤ保全協会

IHC-JAPAN: The Institute for
Himalayan Conservation Japan

Shangri-la

シャングリラ



2021年度 会員総会報告



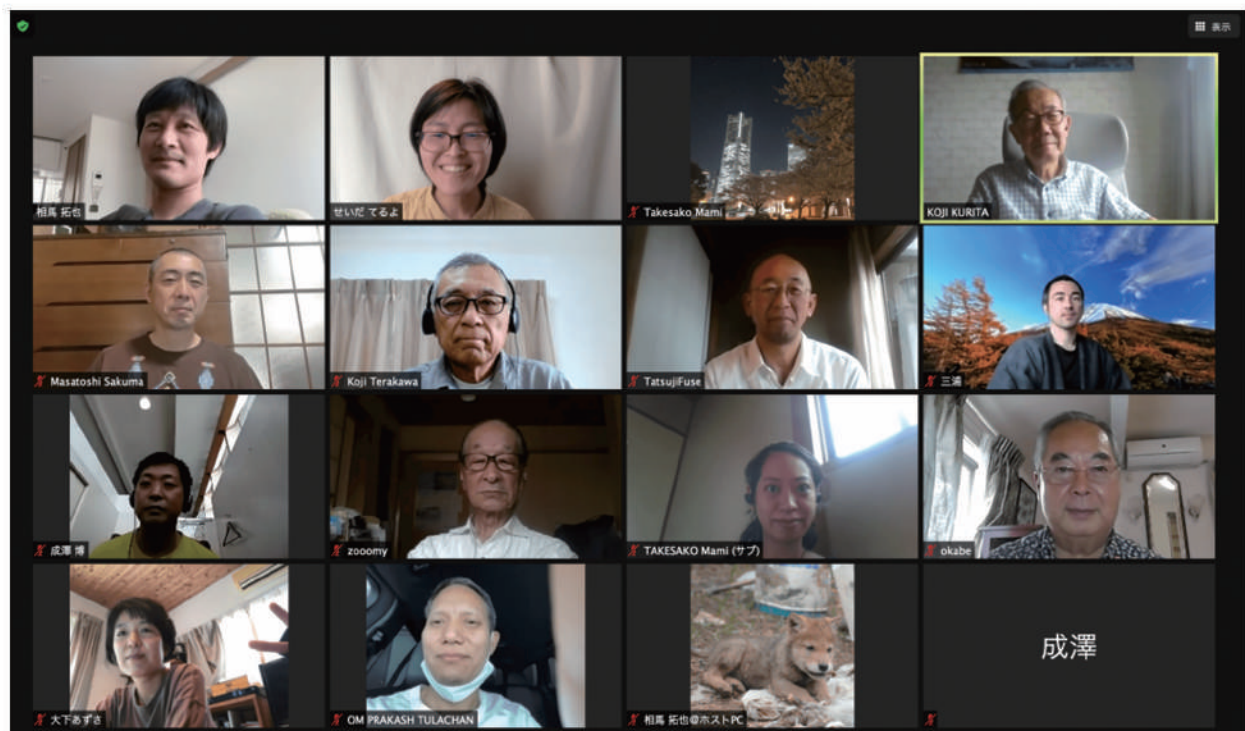
100円でヒマラヤに1本の を植えよう!

One coin One tree on Himalayan, tomorrow will be in your hands.

総 会 報 告

会員総会開催される

2021年会員総会は、6月6日に会員13名が参加しリモートで開催され、議題はすべて承認されました。来年は、通常に戻り一同集合して総会ができることを祈念します。会員の皆様よろしくお願いします。以下に、議案書を掲載します。



第1号議案 2020年度事業に関する事項〔事業報告〕

1. 現地での植林・生活林再生事業

1.1. 植林事業の概要

2020年度は2カ村のプロジェクトサイトで植林・育苗が行われました。年間の育苗数は、バランジャ村26,239本（前年22,573本）、レスパル村11,293本（前年8,160本）（図1）、合計植樹本数37,490本となりました（表1）。昨年度COVID-19の影響により、国境封鎖や物資の不足、人流抑制、集会の禁止などにより、稚幼木の育苗に大きく影響が出ました。ジーン村では2019年度に、IHCとして支援する育苗事業を終了しました。ただし、ナーサリーを閉鎖したわけではなく、村の独自の出資と人材動員により、ナーサリー業務は継続されています。

レスパル村では急傾斜への植林が必要です。植林活動は例年6月～7月にかけて実施され、村議会で植林日を取り決めて村に周知し、村人が参加する形式となっています。植林実施日については、後日連絡をいただくこととなっています。



L1 ビニールハウスで苗床を覆い、発芽をうながす作業が、高地で気温の低いレスパル村では欠かせません。ビニールハウスで育てられた土はほかほかと温かく、種子を大切に育ててくれます。

L2～L3 レスパル村のナーサリーで育つ、オガタマノキ、ハンノキ、パツラマツなどの稚幼木。レスパル村での育苗活動も軌道に乗り、毎年10,000本近くを植林できるようになりました。

L4 ドングリの種子を点播する苗畑管理人のディルさん。ドングリの木は優秀な木材資源となり、シイタケ栽培で種駒を植える原木としても用いることができます。

L5～L6 村のボランティアさんが、種子の苗床となるポリポットに、山から採取した新鮮で栄養分の高い土を丁寧に詰めてゆきます。

表1 IHC2020年度植林実績

植林樹種		バランジャ村	レスパル村
Name of planted tree		Baranja	Lespar
パツラマツ	<i>Pinus Petula (Americal Salla)</i>	9,460	4,645
オガタマノキ	<i>Michlia Exceisa (Shirmu)</i>	1,170	3,347
フユザンショウ	<i>Zantozylum Armatum (Timur)</i>	6,245	223
クワ科イチヂク	<i>Fucus Semicordata (Raikhanew)</i>	625	
オオバイチジク	<i>Fucus Auriculata (Nimaro)</i>	6,500	2,510
ホワイトオーク	<i>Querus Glauca (Saano Phalat)</i>		252
ネパールバターツリー	<i>Aesandra Butyracea</i>	67	
ビャクシン属	<i>Juniperus Indica (Dhupi Salla)</i>	2,130	
グイェ・カース	<i>Guiye Kaath</i>		246
ハンノキ	<i>Alnus Nepalensis (Uttis)</i>		35
ヨーロッパイチイ	<i>Texus Baccata (Loth Salla)</i>		35
合計(本)		26,239	11,293
2020年度総計(本)			37,490

総 会 報 告

1.2. 現地の状況のインタビュー調査（2021年2月）

ネパール国内の遠隔農村部は、ウイルス感染者数やパンデミックそのものは落ち着いているとされています。ただし、国内全域での経済活動の停滞によって、都市部に出稼ぎに出ていた人々が仕事を失っている状況にあります。また、人・物資の往来、市場機能など停滞しており、農村社会はCOVID-19による社会的混乱の二次的な影響を受けている状況にあります。さらに、飢餓をはじめ、自殺者や犯罪などが増加している傾向にあります。

レスパル村

①Gopal Pun氏（レスパル村／教師）

レスパルなどの遠隔農村は、ポカラやカトマンズほどCOVIDの影響を受けていませんが、いまどこへも行けなくなったため出稼ぎができません。コロナの蔓延以降は、村に戻りする労働者も大勢います。農業は収穫時期もあるため、直接の生活改善には直結していません。いまは、なによりも出稼ぎを再開して、収入を確保することが重要になっています。

②Dil Bamapur Pun氏51歳（レスパル村／苗圃管理人）

COVID-19でもっとも恐れているのは、人々の精神や情緒に経験したことのないような悪影響を及ぼしている点です。また、収入と雇用の機会がなくなり、食料品の値段もどんどん高くなっている。地域の小規模農業だけでは、生活は成り立たなくなっています。とくに、運搬費や食料品価格が高騰し、貧困層の生活はどんどん厳しくなっています。COVID-19に立ち向かう精神的サポートも必要になってきています。

③Dhan Bamapur Pun氏68歳（レスパル村／村議員・ソーシャルワーカー）

農村部では、社会間距離の確保や手洗い・うがいなど、これまでない習慣に困惑しています。経済危機はネパールだけの問題ではなく、多くの出稼ぎ労働者が国に戻ってきている。そして、国外にとどまっている労働者も仕事が減り、ネパールへの送金額が激減している状況にあります。今後IHCには、養蜂、ヤギ飼育、ニワトリ飼育などの収入向上の機会が欲しいと考えています。また、2021年以降も、レスパル村での植林活動を継続してほしいと思います。

④Man Kumar Pun氏38歳（レスパル村／村議員・ソーシャルワーカー）

出稼ぎ労働者の帰国や外貨獲得機会の喪失は、人々を精神的にも追い詰めています。国境封鎖の影響で燃料費が上昇し、日用品などのすべてが値上がりしています。感染予防のためのマスク、石鹸、消毒液などが農村部には行き届いていません。

⑤Narshing Pun氏56歳（レスパル村／苗圃管理組合）

このままCOVID-19によって激変した社会が、再び元に戻らないのではないか、という漠然とした不安がすべての人にあります。それでも、IHCのナーサリーでの育苗と植林活動の継続を望みます。

バランジャ村

⑥Bhabiraj Pun氏43歳（バランジャ村／農家）

COVID-19のせいで、村人は精神的にとてつもなく鬱屈した生活を送っています。人々の移動や旅行についての概念がまったく変わってしまったと言えます。遠隔農村部では、十分な感染予防品（マスク・石鹸・消毒液など）が行き渡っていないため、これら医療品の供給があればとても助かります。

⑦Hom Bahadur氏52歳（バランジャ村／農家）

いまは物価の高騰が著しく、たとえお金があったとしてもロックダウンの影響で物資がなにも調達できなくなっています。国境封鎖は解かれつつありますので、今後の改善の心待ちにしているところです。IHCにはコロナが収まった際には、ビニールハウス栽培や灌漑などの農業技術を指導していただきたいと考えています。

⑧Jak Bahadur Roka氏39歳（バランジャ村／バランジャ小学校・校長）

遠隔地でもある農村でも、社会間距離の確保や手指消毒の徹底など、生活スタイルが激変してしまいました。学校に通う生徒のすべてにも、これらを徹底させることをしなければなりません。とくに、コロナ状況下での感染予防に対する意識改革を進めなければなりません。コロナが収まった際には、ゴミ箱や廃棄物置き場の設置、校内・村内をつねに清潔に保つための研修など、子どもたちの環境保全意識を向上できるようなプログラムをIHCと共同で実施したいと考えています。また各クラスへの本棚の設置や図書室の開設などの支援にも期待しています。

⑨Resham Budamori氏48歳（バランジャ村／農家・IHC試験農場管理者）

村の人々は、いまだにワクチンが届かないことへの不安があります。食べ物や日用品が圧倒的に不足しているのに、移動での感染リスクがあるため容易に村をでることができません。しかも、地域の乗り合いバスやタクシーでも、密をさけるために、通常の定員の半分に制限しています。そのため、移動費が2倍になってしまっているのです。そのため、食料を調達するために町や市場にも行けない状況が続いています。また、マスク・石鹸・消毒液が不足しており、とくに貧困者が購入できないことにより、感染を広げてしまう可能性もあります。

⑩Bhusan Budamori氏25歳（バランジャ村／学生）

いまは、村からは簡単には出ることも、戻ることもできないので、みんな精神的にもまいっています。移動・輸送費用の固定相場が、もはやまったく通じないため、ほとんど言い値で支払われています。しかも、村人や遠隔農村の人々はいまだ、COVID-19の本当に恐ろしさに気づいていないように感じます（移動制限や感染予防の徹底などが必要）。政府はワクチン接種をはじめるとしていますが、遠隔地の人々はいったいいつ接種できるのか見当もつかない不安があります。

⑪Kabindra Roka氏（バランジャ村／村議会議員）

コロナの日常が平凡になりつつあるので、危険性を再認識させるような指導が必要と思われます。ネパールでは地域間の移動や人々の接触に対してあまり危機感がなく、感染をする／させるリスクについても、十分に理解できているとは言えません。

現在、事業地を含む遠隔農村のほぼすべてで、深刻な物資の不足が問題となっています。また感染予防のためのマスク・石鹸・消毒液が入手できないことから、わずかな感染者からでも一気にウイルスが蔓延するような危うい状況にあると言えます。さらに物価上昇により、多数の人々が最低限の食料にも事欠く状況があり、今後も深刻化する可能性があります。農村部では、運搬費や移動費の上昇により街からの物資の供給が滞り、かつ遠隔地からも市場にアクセスできない、いわば「孤立状態」に陥っていると考えられます。

IHCでは今後、マスク・石鹸・消毒液などの物資の供給も含めて、できる限りの感染予防対策で現地をサポートしたいと考えています。また農業の近代化やローカルな農作物栽培を通じた収入機会の向上のための技術指導にも、多くの要望がありました。コロナの収束の兆しが見えたとき現地を訪問し、コロナ後の遠隔農村コミュニティの再興につとめたいと思います。

総 会 報 告

2. キウイ栽培による生活・収入向上アグロフォレストリー事業

2.1. バランジャ村での活動報告

本会事業の一環として2017年11月に、バランジャ村で59株のキウイ栽培の試験区(0.18ha)を開始しました。2019年4月にバランジャ村に出張（7日間）し、IHCへの協力農家を募り、なかでもキウイ栽培に熱心な10家族を選定しました。これら10世帯の協力農家さんとは、キウイ栽培の基礎知識を講習会等により共有しました。ネパール中部でのキウイ苗の植え付け適期は12月半ば以降であることから、12月末に新規苗150本（オス30株／メス120株）の植え付けを実施しました（図2）。



B1



B2



B3



B4

B1 バランジャ村のIHC協力農家のみなさんが、2019年12月に植えたキウイ苗。高さは1.5mまで成長し、今年はキウイ棚に広く葉を広げると予想されます。

B2 キウイ棚は、現在は地元で採れた竹製で組んでいますが、2~3年後には鉄製のしっかりした棚に換装する必要があります。

B3 以前はキウイ棚の下に、小松菜やひよこ豆など、別の作物を栽培して生育が遅くなってしまったりしました。現在は、キウイ栽培地の地面はきれいに整えられています。

B4 小学校に寄贈したオスとメス2本のキウイ苗。この1年間で屋根に届くほどに成長しました。

3. 日本国内事業の活動報告

3.1. 国際交流・理解促進事業

ヒマラヤ山岳エコロジースクールは、事業実施にかかる旅行業者や人員の手配が難航しており、集客面でも不安定要素があることから、ひきつづき体制を立て直して再稼働する準備を進めています。

3.2. 国際協力イベントへの参加・広報活動・地球市民学習事業

例年恒例となった国際協力関連団体の一大フェスティバルであるグローバルフェスタ2019（JICA／外務省共催）が9月28日(土)～29日(日)に開催され、IHCブースを設けた広報活動に参加しました。同会ではスライド等を用いて、近年のIHCの活動報告を実施しました。報告会では、川喜田二郎先生が活躍されていた1970年代～90年代の植林活動等のムービーを紹介し、現在の生活林保全や織物・紙製品による収入向上プロジェクトまでつながっていることお話ししました。

3.3. 研究学術面・社会的要請への応答・政策提言など

筑波大学人文社会系の「中央アジア人材育成プロジェクト」の連続講演会の一環として2021年2月26日(金)、「ヒマラヤ山脈にアグロフォレストリー国際協力の可能性を探る～ネパールでの植林・果樹栽培によるコミュニティ開発の経験から～」のタイトルで、ヒマラヤ・ネパールの文化・社会とIHCの活動を紹介しました。

日本地理学会 2019年度春季学術大会（駒沢大学／2020年3月20日）に「ネパール西部におけるキウイ果樹栽培を軸とした村落開発アグロフォレストリーの社会実践」のタイトルでエントリーしました（COVID-19により2022年度に再延期）。

第2号・第4号議案

2020年度予算・実績 2021年予算

11ページ「2020年度予算実績対比表および2021年度予算(案)」を参照してください。

総 会 報 告

第3号議案

2021年度事業計画

1. ネパール現地での事業・活動計画

1.1. 植林・生活林再生プロジェクト

◇【パルバット郡】 昨年に引き続き、パルバット郡レスパル村に2016年に建設した苗畑の整備・拡充を進めていきます。新しい事業地であるレスパル村の植林事業も軌道に乗ってきています。ひきつづき、本会のこれまでの事業地の苗畑管理人を送り、交流・派遣研修をするなど、事業を通して得た叡智の有効活用方法についても住民とともに学んでいきます。COVID-19で活動が制限されるため、無理をせずに今期2021年度の育苗数は10,000本を目標とします

◇【ミャグディ郡】 昨年度で予算上のサポートを終えたミャグディ郡バランジャ村とジーン村でも、フォローアップ続け、植林事業および果樹栽培事業を推進していきます。両村は経験を積んだ苗畑管理人の技術の向上が見られるため、今後は果樹や花卉など新規栽培植物のパイロット栽培地としての役割を確立させていきます。

◇ ダウラギリ地域～カリガンダキ溪谷で、既存のナーサリーのフォローアップに加えて、新規ナーサリー1～2カ所の開拓を計画します。これにより、育苗技術の伝播や植林の大切さを広めるため、また熟練の苗畑管理人を派遣することによるコミュニティ間の交流を推進します。

1.2. キウイ栽培によるアグロフォレストリー

◇ 昨年に引き続き、バランジャ村のキウイ栽培試験区の整備を実施し、来年度への結実に向けた準備を進めます。

◇ 本年もバランジャ村で協力農家10世帯程度を募集し、キウイ苗を無償で提供し、「IHC協力農家」としてキウイ栽培地の拡大と栽培者数の増加による地域理解の促進を進めます。

◇ アカデミアでの人脈を活用し、ネパール現地の教育機関（トリブバン大学など）、民間団体（NGO/NPO など）、日本大使館との連携を深め、現在の活動を農業支援・アグロフォレストリーとして確立します。

1.3. ポカラ近郊での農業試験サイトの開設～非木材・林産物育成プロジェクト

◇ 本年より、ポカラ近郊に新たに農業試験サンプルサイトの設営を検討します。日本から持ち込んだ野菜・果物（トウモロコシ、シイタケ、ブルーベリー、梨、桃など）の種子を播種・栽培し、地域環境への定着について検証します。これら実験区での検証によって得られた結果にもとづき、あらたなプロジェクトの計画・立案に活用します。

1.4. 現地IHC-Nの新規体制への移行

◇ 本年度より、現地IHC-Nの体制の抜本的な見直しと刷新を検討します。IHC-Nの立て直しや人員体制の見直しのほか、IHC-International（仮）などの企業法人の設立により、現地での活動をよりダイナミックに展開する計画があります。

1.5. 事業完了地のフォローアップ事業

◇ パウダル村のチーズ工房支援：

パウダル村では2000年代初めころに、チーズ工房を村人とともに設立しました。現在は、7頭の乳牛からとれた生乳で、チーズを作っています。チーズ工房の収益は、ほぼすべてがパウダル村唯一の学校に寄付されます。同村の学校は所属する教員の給与や設備などを自己資金でまかなうことが難しく、チーズ工房は貴重な収入源にもなっています。

今後は、乳用牛の提供、学校児童とのチーズ作りによるブランド化、都市部やホテルなどへの販路の拡大・確保など、IHCとして支援を提供したいと考えています。

◇ スワンタ村のロープライン整備：

スワンタ村は1970年代に、川喜田二郎先生が初めてロープラインを設営した場所であり、本会活動のいわば原点でもある土地です。この村では2本のロープラインが設置されています。このうちの1本はいまでも薪や飼料木の運搬に使用され全長はおよそ480mに及びます。

現在の課題は、ワイヤーそのものよりも荷物の運搬に使う滑車が経年劣化しているとのことでした。そのため、IHCではこの滑車2本と、新規ワイヤーの調達も含めて現地への寄贈を検討します。次回の訪問時には、村の代表者にIHCから滑車数台を贈呈したいと考えています。

◇ シーカ村等の観光客へのアウトリーチ：

シーカ村は1990年代に、集中的に植林活動を実施した場所です。現在は、カリガンダギ河からトレッキングに訪れる人々の中継地であり、多数の往来があります。今後はゲストハウスなどに、本会活動のパンフレットなどを置かせてもらい、IHCの40年間以上におよぶ活動を周知したいと思います。

以上のように、新事業から10年以上、中には40年以上の時を経て、IHC地域支援事業の成果や効果が多々見ることができます。今後もフォローアップを通じて、シーカ谷コミュニティとの交流を続けていきたいと思っています。

1.6. 科研費と助成金による広域ヒマラヤ地域

（ネパール／ブータン／インド北部）の調査研究

◇本年度2021年4月～2026年3月まで、科研費基盤研究A「ヒマラヤの人と自然の連環：東西3地域の比較」（代表者：渡辺悌二・北海道大学教授）が採択され、分担者として研究費配分（5ヵ年で約450万円）を受けることとなりました。ヒマラヤ地域の学術研究にコミットしつつ、現地のニーズやエスノグラフィを正確に知ること、今後の活動にもさらなるコミットメントを生み出せるようにします。

◇ 緑の地球防衛基金様よりSMBCファイナンスサービス株式会社と協力している「地球にやさしいカード」の2021年度5月の助成金配分額として、231,000円を助成いただきました。

◇ ネパールに限らず、ブータンやインド北部などでの自然科学・人文社会科学調査を実施し、ヒマラヤ地域の人々の暮らしと自然を包括的に理解することに努めます。

総 会 報 告

2. 日本国内での事業・活動計画

2.1. 国際交流・理解促進事業

- ◇ 第23回ネパール・ヒマラヤ山岳エコロジースクールについては、開催に向けた準備を進めます。
- ◇ ヒマラヤ地域やネパール、山岳、環境保全、国際協力・交流に関心のある市民交流の場を設け、IHCの活動の普及と理解を促進します。

2.2. 国際協力イベントへの参加および広報活動、地球市民学習事業など

- ◇ グローバルフェスタ2020年度（10月）に出展し、本会の活動を広く一般の皆様に伝えます。
- ◇ 現地・国内の活動はホームページで随時報告し、会報紙「シャングリラ」を年に2回発行します。
- ◇ 日本国内の山岳地方が直面している問題を調査し、途上国のフィールドでの問題解決の経験と成果を活かした国内・海外の双方向での活動の可能性を模索します。

2.3. 人材育成およびネットワーキング、奨学金・助成金事業の整備

- ◇ 助成金事業の応募体制を整備し、若手研究者、実務者、社会起業家数名に対して、毎年少額（10～30万円）の活動費・助成金を支給する。将来的に IHCとの協働が可能な、若手研究者、社会起業家、実務家などを発掘し、ヒマラヤ地域にたずさわる人材の底上げを目指します。本会への活動の同行、業務の委託・割り当てなどを通じて、共同の可能性を模索します（京都大学、早稲田大学、筑波大学などでリクルート）。
- ◇ SDGsへの取り組みをするマルチステークホルダー(政府機関、企業、NGO、教育機関など)の共同勉強会に参加し、各セクターの得意分野を活かした課題対処法や取り組み方への学びを進めます。
- ◇ 昨年に引き続き、SDGsに向けた環境保全や生産体制のあり方に目を向け、産学官の様々な立場の人々とのネットワーキングを推進し、IHCが人と知識をつなぎ合わせるハブ機能の確立を目指します。

2.4. 研究学術面・政策提言

現地の現状や事業活動をアカデミックに調査・分析し、成果を査読誌や学会で発表します。地球人類が解決すべき喫緊の課題SDGsの理念のもと、政府機関、企業、大学、NGO、プロジェクト参画者などのマルチステークホルダーが集まり、今後の地球規模の問題解決のあり方を協議する交流会や勉強会などの場面に積極的に参画し、複数セクターが協働で活動する際に大切にすべき現地側の視点や活動を提言します。

第5号議案 理事・監事役員改選

会長 相馬 拓也
理事 栗田 康二
監事 本田 新市

布施 達治

佐久間 雅俊

竹迫 真美

第2,4号議案 2019年度予算実績対比表および2020年度予算(案)

2020年度 2020年 4月 1日 ~ 2021年 3月 31日

2021年度 2021年 4月 1日 ~ 2022年 3月 31日

(単位:円)

科 目	2020年度予算	2020年度実績	2021年度予算
I 経常収益			
1. 受取会費			
個人会員会費	300,000	230,000	230,000
団体会員会費	60,000	30,000	30,000
2. 受取寄付金			
受取寄付金	1,100,000	829,447	800,000
3. 受取助成金等			
受取助成金	500,000	520,139	500,000
受取補助金	0	0	0
4. 事業収益			
自主事業収益	100,000	0	0
5. その他収益			
受取利息	0	22	0
為替差益	0	0	0
雑収益	0	0	0
経常収益計	2,060,000	1,609,608	1,560,000
II 経常費用			
1. 人件費			
給料手当			0
福利厚生費	0	0	0
人件費計	0	0	0
2. その他経費			
現地活動・評価費	1,000,000	225,002	700,000
売上原価	50,000		0
旅費交通費	600,000	1,488	600,000
業務委託費	0	0	0
保険料	0	0	0
広報費	50,000	31,870	100,000
通信運搬費	100,000	39,869	50,000
消耗品費	5,000	110	5,000
事務用品費	15,000	781	10,000
図書資料費	0	0	0
諸会費	10,000	0	5,000
会議費	10,000	0	5,000
開発費	0	0	0
研修費	0	0	0
交際費	0	0	0
租税公課	0	0	0
支払手数料	25,000	440	5,000
水道光熱費	0	0	0
地代家賃	0	0	0
貸借料	150,000	58,320	50,000
為替差損	0	0	0
雑費	45,000	0	30,000
その他経費計	2,060,000	357,880	1,560,000
経常費用計	2,060,000	357,880	1,560,000
当期正味財産増減額	0	1,251,728	0
前期繰越正味財産額	4,060,412	4,060,412	5,312,140
次期繰越正味財産額	4,060,412	5,312,140	5,312,140

事

務

局

だより

編集後記

IHCネパールのスタッフのルケシュさんが7月に新型コロナに罹患しました。
村でもポカラでも新型コロナが流行っています。
ネパールの罹患状況は、総数74万人死者1万人で
日本より人口比では厳しい状況です。
ピークは5月に1日8000人が罹患しました。
会員の皆様も、くれぐれも自粛してお気をつけください。



寄付で支援する

100円で1本の木がヒマラヤに植えられます!!
1口3,000円から何口でも結構です。
下記の振込み先にご送金ください。

■ みずほ銀行新宿南口支店

普通2005209

NPO法人 ヒマラヤ保全協会

マンスリーサポーターになる

毎月1,000円からマンスリーサポーターに
なることができます。マンスリーサポーターの
皆様には、「活動報告書&計画書」年1回)
をお送りします。

■ 郵便振替

00100-0-709154

※銀行振込みをご利用いただいた場合
は、ご氏名（ふりがな）とご住所を、
e-mailにてご連絡ください。

会員になる

年会費：個人会員 5,000円・団体会員 30,000円
会員の皆様には、現地の活動が盛りだくさんの
会報『シャングリラ(Shangri-la)』をおとどけします。

100円で1本の木をヒマラヤに植えよう！ ご支援お待ちしております！

シャングリラ第109号 2021年8月21日発行 編集・発行 NPO法人 ヒマラヤ保全協会

TEL: 080-3570-8458 e-mail: ihcjpn@ybb.ne.jp ホームページ: <http://www.ihc-japan.org>